現代のしつけについて考えてみましょう

11月3日健康まつり特別講演として、元宝仙学園短期大学教授古川伸子先生を迎えて「幼児期のしつけと家庭生活について」のお話しをいただきました。先生の講話を以下にまとめましたので、育児の参考にしてください。

健康まつり特別講演から

今の時代を生きている子どもたちのストレスを、今という時代を大人がしっかりと認めながら育児をしていかないと「すぐ切れる」「自主的に何も出来ない」のようなストレスだらけの子どもたちになってしまう。こんな子どもたちを一人でも助けてあげるために一緒に考えてみましょう。

現在、死語に近い「しつけ」という言葉の意味を考えてみると「自由にのびのびと」という考えかたは大変よいと思うが、自由にのびのびする部分と、人間として教えておかなければならないことの区別を大人がしっかり理解したうえで教えてあげることが「しつけ」ではないかと思う。特に乳幼児期は両親・祖父母との関係の中から育っていく大事な時期でもある。

この時期に家族の一員として、一人の人間として子どもを認めながら接してあげること、小学校3年生位まではしっかり手を掛けてあげることが「子どもの生きていく力」を育てることになるのであろうと思う。

熱心に耳を傾けている参加者

親として「しっかり手を掛けてあげること」の3本柱

①まず3食必ず食べさせてあげること

子どもの食べた物の内容を親が知っていること、そしてその内容によって食事に変化がつけられること（栄養バランスの管理）が大切

②ちゃんと寝ているかどうかの確認（睡眠の管理）

③暑さ寒さ対策を含めた身支度や整理整頓・清潔についての教え

以上最低の生きていく力を家庭で身につけてあげられるかどうかが「生きていくための判断力」となり、子どもたちは自信を持って社会（保育園・幼稚園・学校など）に適応していけるようになる。

「人間としての関係を身につける」ことの3本柱

①言葉を使って、生まれたときから人間同志で話し合う時間を1分でも30秒でもいいから持ってあげる（事実を言葉にする）

②大人がしていることを子どもたちは自然に見ながら学んでいる

大人が生活しているところをなるべく見せてあげて欲しい。（寝る姿・食べる姿・着替える姿・食事を作っているところ・お風呂はいっしょに入る・買い物など）子どもたちは、この何気ない仕草の中に生きていく力を学んでいく。

③子どもが困っているときは、まず一緒に困ってあげる

子どもを攻めないでください。答えられない答えは要求しないでください。

どうしたらよいかは、その子の回答を待ってから一緒に考えてあげましょう。

最後に、子どもたちは乳幼児期から小学校3年生までは両親や祖父母との関係の中から育っていく。小学校高学年から高校生までは友達や学校生活の中で成長していく。大学生からはしっかり自分の力で生きていけるように親として成長をサポートしてください。

折り紙上手に折れたかな・・・「指先を使っての遊び」

（多くのかたがたに講演を聞いていただくために今回は託児所を設けました）